

日本の文学や文化を海外に発信する役割を担った「JLT」復刊第2号は国際ペン東京大会などで注目度大。

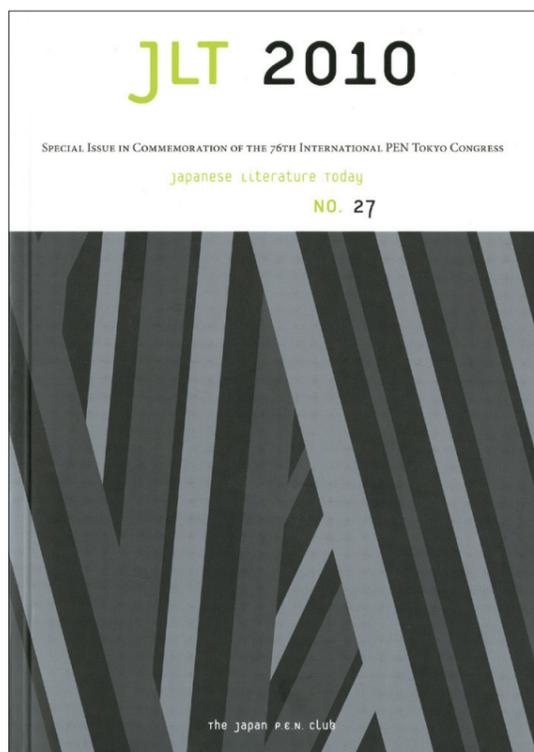
文学作品にはそのときどきの、国や文化圏が置かれている状況が反映されている。それゆえ日本文学を英訳して海外に紹介することは、日本を理解してもらうことにつながる。日本ペンクラブ創立75周年や国際ペン東京大会で、「JLT」の存在感は一層、増すに違いない。

昨年、復刊された「JLT」は文学の輸入超過解消に一役。

日本人は計り知れないほどの文物を海外から取り入れてきた。中国や朝鮮半島はもとより、ポルトガルやオランダ、さらにはイギリス、ドイツ、フランス、アメリカ、ロシアといった欧米諸国などから多くのものを学び、それらを自らの血肉としてきた。そうした状況を“輸出入”という単純な言葉でくれば、近代以降は工業製品を中心とする輸出大国であるが、思想や文化という面から見れば、明らかに遠い古より輸入超過の状況が続いている。その最たるものの一つが、文学といえるのではないだろうか。

「輸入超過は現在も続いている。かつて自分たちが海外文学から多くのものを学んだように、今度は逆に日本文学を海外へ向けて発信していかななくてはいけないのだが、翻訳の問題などもあり、日本文学は日本国内に向けた一方通行の状況にある。そのような状況を打破するためにも、『JLT (Japanese Literature Today)』の発刊は大変な作業だが、誰かがやらなくてはならないこと。しばらく休刊が続いていたが、おかげさまで昨年度に復刊することができ、日本文学を海外へ発信するための手段の一つを回復することができた。こうした事業は営利追求にはそぐわないため、一般の出版社などでは不可能なことなのです」

そう話すのは日本ペンクラブの専務理事で、「鉄道員」や「中原の虹」などの代表作で知られる作家の浅田次郎さん。「JLT」は、その時代の日本文学を広く海外に紹介



刊行された「JLT」NO.27



「JLT」は日本文学を海外へ発信するための手段のひとつと話す浅田次郎さん

する目的で、1976年から毎年、日本ペンクラブによって英訳(一部、仏訳も)・発刊されてきた。しかし、それまで資金面で刊行を支えてきた公的機関からの援助がなくなくなり、2000年度版を最後に休刊状態にあったのだが、昨年度、AJOSCの助成もあり、9年ぶりに復刊した。主に海外の大学図書館や日本文学の研究施設、世界各国のペンクラブなどへ無償配布されたが、『大変、役立った』『貴重な資料となった』など、同封したアンケートに対する返答も多く、これまで以上に手応えを感じた(事務局 宮川慶子さん)という。日本文学の“いま”を知り

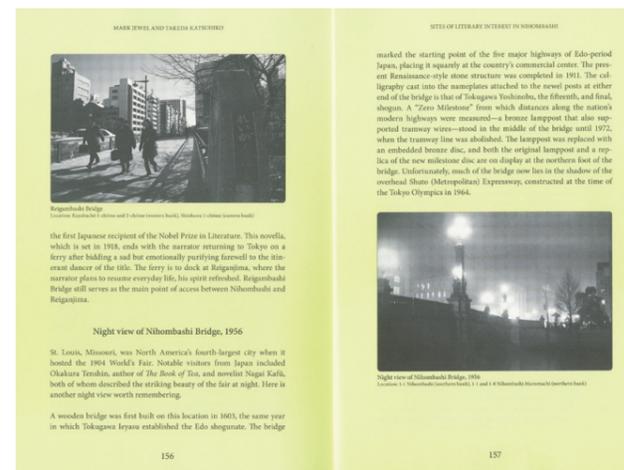
たいというニーズの表れといえるだろう。

日本文学の情報が求められている今、多彩さを盛り込んだ「JLT2010」の刊行。

「昨年、ロシアのブックフェアに出かけましたが、そのときに復刊された『JLT』を持っていきました。村上春樹さんの影響が大きいのですが、ロシアの女流作家としていま最も注目されているオリガ・スラヴニコワさんなども、日本文学に大いに興味があるということでした。『JLT』のような、せめて英語で書かれたものでいいから、日本の現代作品の情報がほしいと盛んにいっていました。ロシアに限らないことですが、海外の文学者に会うときは、やはりこういったものがあると話の糸口になりやすいし、日本文学の現在について語るときに語りやすい」日本ペンクラブ内に設けられた「JLT」編集小委員会のチーフとして、復刊事業の中心を担った編集者の宮田昭宏さんは、そう話す。

文学作品は単に鑑賞され、評価されるだけではなく、それを介して異文化に生きるもの同士の交流や理解に役立つ。アニメ、マンガ、オタク文化、コスチュームプレイなど、日本のサブカルチャーに対する興味が海外で高まっていることは周知の事実だが、現代社会が抱える問題を反映した文学作品もまた、日本や日本人を知ってもらうための一助になる。

AJOSCの助成を受け、今年度も引き続き「JLT」が刊



「JLT」の中の「日本橋の文学名所」で紹介されている1956年当時の日本橋 ©三井不動産株式会社

担当者より



助成が継続されたことで、さらに日本文学の多彩さを表現できました。

社団法人 日本ペンクラブ
「JLT」編集小委員会チーフ
宮田昭宏さん

翻訳をすることで日本文学や日本語のすばらしさが逆に照らし出されることもあるし、継続的に刊行することで反省点を活かしたり、新しい試みにもチャレンジできる。その意味でもAJOSCの助成は大いに助かります。文学受容の不均衡是正にも一役買うはずですよ。



編集会議の様子

行された。短篇全訳(2作品)、長編紹介(3作品)、短歌、俳句、座談会のほか、「日本ペンクラブ75年のあゆみ」や「日本橋の文学名所」といった特別読み物も掲載されている。「編集作業を通して振り返ると、2009年の日本文学は長編が充実していた。村上春樹さんの『1Q84』以外にも力作が多かった。また、短歌や俳句にも新機軸といえるような作品があった。ヴィヴィッドに動いている日本文学の多彩さを改めて思い知らされたし、それを誌面で紹介することができた」と、宮田さん。今年9月には国際ペン(日本ペンクラブは、その傘下)の年次大会が東京で開催されるが、世界各国から集まった文学関係者やジャーナリストに、今年度の「JLT」が資料として配られるという。日本文学を海外へ発信し続けるという貴重な役割を今後も期待したい。